

# 釜石グレンセンター(株)インタビュー(H28.6.15)

- 釜石港背後で穀物サイロの倉庫業を行っている釜石グレンセンター(株)姫野社長に、釜石港の利用や今後の取組みなどについてお伺いしました。
- 同社は、飼料原料(穀物)を釜石港から荷揚げして、自社サイロに保管後、隣接する飼料工場等へ供給しています。

釜石グレンセンター(株)  
代表取締役社長 姫野 健二氏(左)



～インタビュー要旨～ (聞き手:釜石港湾事務所長 小澤 敬二)

Q:事業概要は?

弊社は、平成元年に設立、平成3年に稼働を開始し、穀物サイロでの倉庫業を行っています。穀物などの飼料原料を輸入し、自社サイロに保管後、サイロとコンベアで接続している飼料工場の釜石飼料(株)を中心に、一部は内陸のユーザーにも供給しています。釜石飼料(株)で生産された飼料は、北東北の畜産農家へ運搬され、ニワトリや豚などのエサとなっており、北東北の畜産を支える拠点となっています。

Q:釜石港から荷揚げしている貨物は?

飼料穀物(とうもろこし、こりゃん、大麦等)を、主にアメリカ・ブラジルなどから、積載数量8万トンクラス的大型貨物船(最大時)で運搬し、新日鐵住金専用棧橋(水深14m)を活用して、バケット式アンローダーで荷揚げしています。貨物量は年間20万トン程度で、輸入穀物の大型本船は年間6隻程度入港しており、他にも国内で加工された副原料である大豆ミール等の内航船が年間80隻程度入港しています。

Q:釜石港利用の利点は?

水深14mの係留施設は、穀物取扱施設としては国内最大規模で、大型貨物船が満載で釜石港に入港して一定程度の貨物を荷揚げすることで、貨物船の喫水が浅くなり、他港の水深が浅い係留施設にも接岸可能となりますので、輸送効率化に寄与しています。

Q:棧橋からサイロまでの運搬方法は?

1,250mあるベルトコンベアで棧橋から背後の保管サイロまで直接運搬しています。ベルトコンベアは500トン/hの輸送能力があり、非常に効率的な輸送システムとなっています。



▲釜石グレンセンター位置図



▲穀物の荷役状況



▲被災したベルトコンベア



▲釜石グレンセンターサイロ(右)  
釜石飼料工場(左)



▲サイロ屋上から見る釜石港

**Q: 東日本大震災時の状況は？**

サイロの高さは地上40mで屋根もあるため避難場所として利用できました。十数名の社員は停電してエレベーターを使えなかったため、階段で上まで登りましたが、津波第一波が到来したのは、ちょうど全員が登り終えた頃でした。また、サイロ自体はほとんど被害がありませんでしたが、津波により、弊社事務所は全壊、港のアンローダー、ベルトコンベアは大きな被害を受けました。

**Q: 震災後の復旧の経過は？**

復旧にあたっては、弊社は釜石飼料(株)と一心同体であるため協調して進めました。平成23年7月には、飼料工場の稼働及び弊社サイロからの原料供給も再開しました。震災直後は、アンローダー等が利用できる状態になかったため、原料は内航船で公共ふ頭まで運び、トラックでサイロまで運搬しました。新日鐵住金専用棧橋からベルトコンベアでの原料搬入を再開できたのは、平成24年1月になってからです。

**Q: 事業を行う上で重要な点は？**

飼料の需要自体は急な増減がないのですが、3日間供給が止まると畜産農家での飼料ストックがなくなりますので、引き続き、厳格な衛生管理のもと、新鮮な飼料の安定供給を続けていくことが重要だと考えております。卵や鶏肉などが物価の優等生とされているのも、安定した飼料供給により畜産農家での業務効率化が図られているからこそです。

**Q: 今後取り組んでいくことは？**

地味ですが、飼料工場の稼働を維持するための安定操業こそ、弊社に与えられた最大の使命だと思っています。

東日本大震災の際は、サイロの下部は浸水しましたが、貨物の被害は全くと言っていいほどなく、サイロ内の貨物を出荷することに問題ありませんでした。しかしながら、荷役運搬設備(アンローダーやベルトコンベア)が被災したことにより、新たな貨物の入荷には、弊社のみならず同業他社も苦労しました。地震直後の停電により、荷役運搬設備の安全対策を施す前に津波が襲来したため、大きな被害になった事例を教訓とし、今後は、非常用電源を設置するなどの対応を検討していきたいと考えています。

**Q: 最後に一言お願いします。**

近年は復興道路等整備による物流ルート構築の追い風もありますので、卵や食肉の安定供給のため、使命感をもって取り組んでいきたいと考えています。

姫野社長様、お忙しいところインタビューさせて頂き、ありがとうございました！